



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3628 号 2017.4.30 発行

ダウン症の息子、進路どうすれば 奥山佳恵さん悩む選択 朝日新聞 2017年4月29日



奥山佳恵さんと次男の美良生君=西田裕樹撮影 女優でタレントの奥山佳恵さんは、ダウン症の次男美良生(みらい)君(5)の入学を来春に控える。目下の悩みは



やはり、どの進路を選ぶかだ。奥山さんに話を聞いた。

美良生(みらい)を育てながら、理想と現実を感じています。「障害者と健常者、共に生きていこう」「だれもが過ごしやすい世の中に」と語られる一方、現実



は6歳で分けられる。小学校の通常の学級、特別支援学級、特別支援学校のどれかに選別されるところから教育って始まる。「まぜこぜ」の社会をめざすのに、なぜ初めからまぜこぜじゃないんだろう。すごく不思議です。



みんな得意、不得意があって凸凹なのが社会でしょう。じっとしてられない子、勉強ができる子、いろいろいて、支援が必要な子の数だけ先生が増える。子どもも、それぞれが自分にできることを考え、



フォローするところはフォローしてクラスができあがっていく。それが私の理想です。

障害児を分ける必要なんてない、どんな子も同じ教室で受け入れたい、という校長先生お二人に縁あって出会いました。ただ、現状はその先生方が講演会を開いているくらい、分け隔てのない教育の間口はまだせまい。始まったばかりなんだと感じます。

この子と同年で障害のない友だちがいます。5歳どうしだと障害の有無を意識せずに遊べるんですね。一緒にいるところを見ていたら、その子は美良生のできることを見つけて、2人で楽しそうに遊んでいました。何かができないから付き合えないではなく、できることを探して遊ぶ。まさに、理想の社会がここにあると思いました。

「闘病記フェス」5月3～5日に大阪で 約400冊展示 朝日新聞 2017年4月29日

乳がんを公表したフリーアナウンサー・小林麻央さんら著名人の闘病体験が注目を集めるなか、一般の人の闘病記にも目を向けてほしいと、関西の出版社などが5月の連休、大阪市内でイベントを開く。患者やその家族が体験を語るほか、自費出版を中心に約400冊の闘病記を展示し、来場者に手に取ってもらう。

タイトルは「闘病記フェスティバル まえをむいて生きる」。23歳で子宮頸(けい)がんを宣告され、子宮を摘出した阿南(あなみ)里恵さん、前立腺がんや膠原病(こうげんびょう)患者、小児がんの遺族や患者家族のサポーターらの講演を予定し、自費出版に興味がある人の相談コーナーも設ける。

主催は関西の出版社を中心に構成された「チーム闘病記」。5年前からがん患者支援イベントへの参加や募金活動を続けている。金井一弘代表(61)によると、2000年代に入って一般の人の闘病記出版が増えた。「病気になっても隠すのではなく、オープンに情報交換する時代。日常の過ごし方や心構えなど、医師の指導ではカバーしきれない部分で、闘病記を役立ててほしい」と話す。

3～5日の午前10時半～午後5時(5日は午後3時)、大阪市天王寺区の近鉄百貨店上本町店・近鉄文化サロンで。無料。講演は各日2、3回。詳細は出版社「星湖舎」(06・6777・3410)のホームページで確認を。(机美鈴)

カタログで障害者手作り品を紹介 岡山市社協作製、購入者拡大へ

山陽新聞 2017年04月29日

障害者の手作り品を掲載したカタログ

岡山市社会福祉協議会は、市の委託を受け運営する「福祉の店 元気の輪」(北区表町)で取り扱っている商品を中心に、障害者による手作り品のカタログを初めて作製した。市民らに幅広く知ってもらい、購入者の裾野を広げることが狙いで、菓子や日用品、木工・ガラス製品など市内27事業所の166品を紹介している。

カタログはA4判、カラー32ページ。手作りのクッキーやパンのほか、木製の名刺入れ、子ども向けのフェルトのおもちゃなど、商品ごとに写真や値段を載せている。品物に商品番号を割り振り、カタログの最終ページにあるファクス注文用紙を使えば発注もできる。

商品は、社会福祉法人やNPOなどの事業所ごとに整理。このうち、社会福祉法人浦安荘の作業所・うらやすガラス幸房(南区浦安本町)は、ブルーの花瓶(600円～)やガラスコップ(700円～)、風鈴(千円)といった美しい仕上がりの商品に加えて、吹きガラス体験ができることを案内した。大半の事業所は「楽しく、まじめにをモットーに頑張っている」といったメッセージを添え、商品に込めた思いなどを伝えている。

同協議会は、これまでホームページで商品を紹介していたが、インターネットを使わない人らにも情報を届けようとカタログの作製を企画。今年3月に完成し、3千部を作って市内の公民館や福祉交流プラザなどで無料配布している。

同協議会は「元気の輪を知らない人も多い。カタログを見て商品を購入してもらうことで、障害者の社会参加の後押しにつなげたい」と話している。問い合わせは同協議会企画総務課(086-225-4051)。

【関西の議論】「ソーシャルビジネス」って何? 子育て、介護、環境…ノーベル平和賞で

脚光、身近な問題をビジネス手法で解決、利益も

ソーシャルビジネス・ドリームパートナーズの投資先として決定したカンボジアの「ドリームガールズプロジェクト」で作品を披露する女性＝2013年3月、プノンペン

子育てや介護、環境保護、地域活性…。身近な社会問題をビジネスの手法を使って解決しようというのが「ソーシャルビジネス（SB）」。

2006年のノーベル平和賞に、貧困層向け小額融資「グラミン銀行（バングラデッシュ）」が受賞したことで一躍注目を集めたが、日常の暮らしではなじみが薄い。ビジネスの現場をのぞいてみると、思いがけない可能性を秘めていた。（原田純一）



聴覚障害者が研修指導

「声や言葉を使わず、自分の出身地や趣味を他の人に伝えてください」ー。昨年夏、神戸市内の大手スポーツメーカーで、一風変わった研修会が開かれた。アジアや欧米などさまざまな国籍の従業員が働く同社の労働組合が主催し、欧州出身の1人を含め約15人が参加した。

研修を指導したのは、もともと聴覚障害者の社会進出支援のために誕生した株式会社「Silent Voice（サイレント・ボイス）」（大阪市西区）。研修プログラムは尾中友哉社長（27）らが開発し、講師は社員の聴覚障害者も務めた。

研修は、「言語や文化の違う人たちとのコミュニケーションが難しい」というスポーツメーカー社員たちの声を受けて実施。メーカーの労組幹部は「情報伝達の難しさと大切さを改めて実感した。会社主催でできないか提案している」と手応えを話した。

尾中さんは聴覚障害のある両親をもち、自身が手話を使えなかった幼い頃はボディランゲージで会話した。「親との体験を生かして、何か社会に役立つことはできないか」と、昨年7月にこうした研修をスタート。会社は社員4人のうち2人が聴覚障害者で、活動は幅広い。

聴覚障害者を雇用する企業だけでなく、携帯電話の販売会社からも研修の依頼があった。複雑なスマートフォンの操作の説明など、言葉以外にさまざまな手法で顧客とコミュニケーションを図りたいというのが狙いで、反響は大きい。

尾中さんは「耳が聞こえないことはハンディではなく『強み』として、聴覚障害者の社会進出を後押ししたい」と力強く語る。

ショーで問題点を提示

昨年12月、「エシカル ファッション コレクション」と銘打ったイベントが関西大学梅田キャンパス（大阪市北区）で開かれた。エシカルとは「倫理的」という意味で、商学部の横山恵子教授のゼミが学生たちにSBを知ってもらおうと企画した。

学生たちは、エシカルファッションに取り組む企業やNPOなどに協力を要請。12社から166点の衣服が提供され、学生らがモデルとなって披露。大勢の服飾関係者らも詰めかけ、関心の高さを示した。

国際競争が激化する企業にとって、コスト削減は喫緊の課題。それだけに開発途上国などでは特に、人件費の無理な抑制や工場排水による環境汚染などが問題となっている。横山教授は「綿を作るときの農薬、ダウンに使われる羽毛を鳥が生きたままむしり取るなど、服を作る過程だけでもたくさん問題がある。こうしたことに注目してもらうためにビジネス形式で実施した」と意義を説明した。

参加企業の関係者からは「コストが高くなり利益率は下がるが、ブランドイメージのアップにつながる。今後も力を入れて取り組みたい」「エシカルは認知度が低く、商品の見た目だけでは違いが分かりにくい。一般消費者にどうアピールするかが課題」などの声が聞かれた。リサイクル衣料販売の企業を立ちあげたいという学生は「今回の経験は今後の事業展開に役立つ」と意欲を見せた。

S Bの事業を支援する大阪NPOセンター（大阪市中央区）は、20年から「ソーシャルビジネスプランコンペ」を実施。今年度のコンペには約40件の応募があり、関心が高まっている。堀野亘求事務局長は「事業の継続性を考えると利益は必要だが、収益性を重視するあまり本来の目的を忘れてはいけない」とし、社会的意義と収益のバランスなどの課題を指摘した。

全盲者ホーム転落防止 落ちない落語、初披露 桂福点さん、駅からの転落防止訴え



毎日新聞 2017年4月30日
創作落語を披露する落語家の桂福点さん
＝京都市左京区で29日、三浦博之撮影

全盲の落語家、桂福点さん（49）が29日、京都市内であった落語会で、視覚障害者の駅ホームからの転落事故防止を訴える創作落語「駅で落ちない落語」を初披露した。電車好きの全盲の男性が駅で人を救う話で、思いやりの大切さを訴えた。

大阪府柏原市の近鉄大阪線河内国分駅で昨年10月、全盲の近藤恒久さん（当時40歳）が誤ってホームから落ち特急電車にはねられ亡

くなった。交友があった福点さんは、視覚障害者が置かれた状況を広く知らせ、無念を晴らそうと落語の創作を開始。近藤さんの遺族や他の視覚障害者らを取材し、完成させた。

落語会は視覚障害者の同行援護事業所「ぼりにポート」（大津市）などが企画し、約100人が来場。福点さんは近藤さんの形見の時計を身につけて高座に上がった。ホームから転落した酔客や、悩みを抱えた女性を目の不自由な男性が救ったり、駅員らがホームの安全対策を話し合ったりする場面をユーモアたっぷりに語った。

会場には近藤さんの母親（66）の姿も。「息子のことを多くの人に聞いてもらえてうれしい。事故防止には人と人との関わりが一番大事。福点さんの落語でそんな心が広まってほしい」と話した。福点さんは終演後、「安全を守るのは人の心。近藤君の思いを継ぎ、今後も語り続けたい」と語った。【関雄輔】

盲導犬に理解を 国際デーに合わせ、神戸でイベント 産経新聞 2017年4月30日 アイマスクをして体験歩行する参加者＝神戸市西区



盲導犬や視覚障害者への理解を深めてもらおうと、兵庫盲導犬協会主催のイベント「国際盲導犬デー in 神戸」が29日、同協会の神戸総合訓練センター（神戸市西区）で開かれた。盲導犬訓練のデモンストレーションも行われ、ボランティアや犬の愛好家、地元住民ら約600人が参加した。

平成13年から国際盲導犬デーに当たる4月の最終水曜日前後にイベントを開催している。この日は盲導犬の訓練の様子を紹介するPR犬によるデモンストレーションのほか、アイマスクで目隠しをした状態で盲導犬の胴輪を持ち、往復100メートル程度の距離を歩く体験歩行も行



われた。

体験歩行に参加した兵庫県姫路市仁豊野の無職、京極行雄さん（66）は「普段目を閉

じて歩くことがないので不安だったが、途中からは安心して歩けた。段差や溝のある所を歩かなければならない視覚障害者の方の大変さが改めて分かった」と話していた。

ギャンブル依存 カジノ法成立受け対策強化 支援を模索 毎日新聞 2017年4月30日

カジノを合法化する「統合型リゾート（IR）整備推進法」が昨年12月に成立したことを受け、政府・与党はギャンブル依存症対策の強化に乗り出している。生活や健康に影響が出て賭け事がやめられなくなるギャンブル依存症は回復可能な病気だが、経済的な損失だけでなく自殺のリスクも高め、家族まで巻き込む。支援や治療の現場を訪ね、必要な対策は何かを考えた。【熊谷豪、下桐実雅子】

ギャンブル依存症の家族教室に集まった人たちの体験を聞く「ホープヒル」代表の町田政明さん＝横浜市旭区で熊谷豪撮影

「ホームレスへの入り口」

会社の売り上げを横領した／離婚後もギャンブルがやめられず住む家を失った／ヤミ金からの借金が返せず自殺を凶った一。

これらは、ホームレスの生活支援や相談に取り組むNPO法人「ビッグイシュー基金」（東京都新宿区、03・6380・5088）が聞き取りをしたギャンブル依存症患者の体験の一部だ。同NPOは昨年、精神科医や回復施設の代表らに呼び掛けて研究会を作り、12人の当事者の依存から回復までの道のりを冊子にまとめた。

誰もがギャンブル中心の生活を続けるうちに追い詰められ、数千万円を失ったり、家族が何度も借金返済を肩代わりしたりしていた。30代の男性は「回復施設を出て1人暮らしを始めると、寂しさから4年ぶりに手を出してしまい、新たな借金できた」といい、問題の根深さが浮かぶ。

ビッグイシューは雑誌の販売などの仕事を通じた自立支援をしているが、ホームレスにギャンブル依存症とみられる人が多いことから、この問題に取り組むようになった。チーフコーディネーターの中原加晴さんは「ギャンブルがホームレスへの入り口になっているほか、仕事をしてお金ができるとまたギャンブルに戻ってしまい、なかなか抜け出せない。自立を阻む壁になっている」と説明する。

抜け出すのに有効と考えられるのが、アルコールや薬物など他の依存症と同じく、自助グループへの参加だ。同NPOでは、GA（ギャンブラーズ・アノニマス）という原則匿名参加のグループを紹介し、各地のGAに通いながら仕事を続ける人もいるという。

家族も犠牲 回復に時間

横浜市旭区のNPO法人「ギャンブル依存ファミリーセンター ホープヒル」（045・364・5289）は、毎週土曜に「家族教室」を開き、当事者の家族に寄り添った解決策を探っている。4月上旬の会では7人が2時間ほど語り合い、70代の女性はこう振り返った。

「息子にお金を渡すことで、むしろ病気を悪化させていたなんて……。罪悪感を感じています」

40代の息子にパチンコで300万円の借金があることが分かったのは20年前。「死にたいぐらい苦しい」と言われ、夫を亡くしたばかりだった女性は「死なれたら困る」と思って金を渡した。その後、「ヤミ金から会社に電話が来る」「これが最後」とさまざまな理由を付けて息子は金をせびり続け、総額1000万円以上を肩代わりしたという。

2年前から家族教室に参加し、息子の金の無心を断れるようになった。NPO代表の町田政明さん（64）が「ギャンブラーが涙を流して『今度だけ』と言う言葉に、だまされ



ないように」と助言すると、女性は「ギャンブラーと同じように、私も感覚がまひしていた。もうこりこり」と、ため息交じりに話した。

町田さんは精神科病院などのカウンセラーを経て、2005年にNPOを設立。当初は薬物など依存症全般の相談に応じていたが、次第に相談が全国から寄せられるギャンブル依存症に特化するようになった。この病気の特徴は、家族も犠牲になること。町田さんは「病院に行けば簡単に治るような病気ではない。家族も巻き込まれる『難病』で、回復にも時間がかかる」と指摘する。

議員立法 今国会目指す

厚生労働省研究班の過去2回の調査では、ギャンブル依存症が疑われる成人の割合を、それぞれ4.8%、2.7%と推計した。これは、同じ研究者らによるアルコール依存症の推計値(1.0%)より高い。しかし、アルコール健康障害対策基本法(14年施行)のような対策を総合的に進める法律がギャンブル依存にはなく、専門の医療機関の整備や治療法の開発もほとんど進んでいなかった。

東京都立多摩総合精神保健福祉センター(多摩市)は07年、全国のセンターで初めて、ギャンブルを含む依存症患者向けに「認知行動療法」と呼ばれるプログラムを取り入れた。自身の行動を想像したり振り返ったりする中で、依存に走る引き金は何だったかを特定し、それを避ける生活を組み立てていく。週1回のペースで計8回。15年度は延べ531人が参加した。

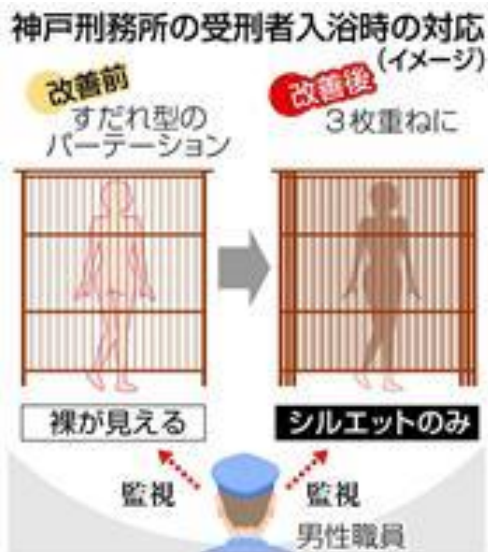
ただ、センターの担当者は「プログラムが合う人も合わない人もいる」と話す。依存の背景には、うつ病や発達障害などが潜んでいることが多い。そこを突き止め、医療や行政の福祉部門につなぐなど、地道な取り組みが必要という。

依存症全体では、厚労省が今年度から、全国の精神保健福祉センターに相談員を配置▽全都道府県と政令市の67自治体でそれぞれ依存症の専門医療機関を指定▽民間の自助グループや家族会への財政支援—などの取り組みを始めた。

さらにIR法成立を受け、政府はギャンブルに特化した対策を検討中。自民、公明両党も議員立法で、対策を加速させる法案の今国会提出を目指している。

ただ、政府・与党の対策強化には、カジノ解禁への理解を求める狙いもある。市民団体「ギャンブル依存症を生む公認ギャンブルをなくす会」(大阪市)の井上善雄弁護士は「依存症対策を隠れみのりにカジノを推進しようという発想はおかしい。公営ギャンブルやパチンコを許容しているのだから、国や地方自治体が責任を持って対策を取るべきだ」と話す。

すだれ越しに入浴監視「裸は見ないで」



性同一性障害の服役に意見書 神戸刑務所の外部委員会

産経新聞 2017年4月30日

神戸刑務所の受刑者入浴時の対応(イメージ)。受刑者は自身を女性と自覚し、不完全ながら性別適合手術も受けていたという

戸籍上は男性ながら社会生活では女性として過ごし、神戸刑務所(兵庫県明石市)で服役する受刑者(42)の入浴時、男性職員が裸を見る状態で監視するのは法務省の性同一性障害に関する指針に反するとして、弁護士や医師らでつくる同刑務所の刑事施設視察委員会が女性職員による対応を求める意見書を提出していたことが30日、分かった。

昨年12月5日付。司法関係者によると、指針をめぐる意見書は珍しいという。法務省によると、性同一性障害や同様の傾向がある受刑者らは昨年3月時点で全国の刑務所などに約50人いる。

性同一性障害がある受刑者らの処遇指針は法務省が平成23年に通知し、27年に改正。今回のようなケースでは「女子職員による対応」か「男子職員が視認し得ない措置」にすべきだと規定している。

意見書などによると、刑務所が浴室や脱衣所の扉の前に当初設置していたすだれ型のパーテーションでは、裸が見える状態だった。刑務所側は意見書の提出後、3枚重ねにしてシルエットしか分からなくするなどの改善措置を取ったという。

受刑者の代理人弁護士によると、受刑者は自身を女性と自覚し、不完全ながら性別適合手術も実施。外形は女性だといい、昨年7月から服役している神戸刑務所でも定期的に女性ホルモンの投与を受けている。

受刑者側は性同一性障害を理由にした処遇の違いは人格権の侵害だと訴えていた。刑務所内では24時間監視のカメラが設置された自殺願望者向けの単独室で居住し、工場での労役もなく、テレビや嗜好品（しこうひん）も認められていなかったと主張していたが、29年に入ってからは改善傾向にあるという。

【刑事施設視察委員会】平成13～14年に名古屋刑務所で受刑者が死傷した事件を受けて18年に施行された受刑者処遇法（現・刑事収容施設法）で設置が定められた。刑務所などの透明性の確保や運営の改善が狙い。法相に任命された有識者ら10人以内の委員で構成し、受刑者らとの面接や視察などを通じて運営状況を把握し、意見を述べる。施設長は意見を運営に反映させ、必要な措置を講ずる努力義務がある。

バヌアツの写真展を企画する 大谷一雄さん /静岡

毎日新聞 2017年4月30日

大谷一雄さん

島国の幸福さを感じて 大谷一雄さん（66）

日本から南東へ約6300キロの南太平洋に浮かぶ島国バヌアツ。その国にある美しいビーチや、人なつっこい笑顔を浮かべる現地の人たちを撮影した写真展を企画している。

2013年1月から2年間、国際協力機構（JICA）のシニア海外ボランティアとして、バヌアツに赴任した。約20年間にわたって尽力してきた特別支援学校教諭としての経験を生かし、障害児教育に従事した。

大小83の島々からなる同国は、新潟県とほぼ同じ広さの約1万2190平方キロに約25万人が住む。



【世界ミニナビ】「猿に育てられた少女」とインドの“闇”…捜し続けた親、警察は「助けてほしければカネよこせ」と言ったと訴えた

産経新聞 2017年4月30日

インド北部ウッタラプラデシュ州の森で発見され病院に収容された少女。「サルと生活する少女」などと報じられたが、事情は次第に明らかになってきた＝4月6日（AP）



インド北部の森で発見された裸の少女が、波紋を広げている。8～12歳とみられた少女は言葉を全く話せず手も使って歩くなど、当初はサルに育てられたとの憶測が飛び交った。しかし徐々に明らかになってきたのは、腐敗や貧困などインド社会に巣くう闇だ。

サルの一団と

AP通信などは4月はじめ、インド北部ウッタラプラデシュ州の森で今年1月に少女が見

つかっていたと報じた。森林管理の担当者が発見したときにはサルのグループと一緒に、衣服を着けてない上に四足歩行し、人間に向かってキーキーとほえるようなしぐさもみせたという。連絡を受けた警察が少女を救い出そうとするとサルが追いかけて襲いかかり、何とか引き離すことができたともいう。

少女は病院に収容されたが、当初は動物のように床から食物を食べ、トイレも使えなかったという。

タイムズ・オブ・インディアが電子版で「サルと生活する少女発見」と報道するなど、事件はインドで大きな注目を集めた。人間の子供がオオカミなど動物に育てられる小説やアニメを引用し、現代版「ジャングルブック」と報じるメディアもあった。

名乗り出た両親

しかし、少女はまもなく人間らしい振る舞いを回復してきた。また診断によって、精神と肉体に障害があることも判明した。

発見されたのは森の奥ではなく道路に近いところだったこともあり、比較的最近、放置されたとみられる。英ガーディアン紙は「家族は面倒を見たくなかったというのが真相だろう」とする人権活動家の見解を報じた。背景には、女兒より男児を好む一部風習や、障害を持つ子供に対するインド政府の援助の貧弱さがあると指摘した。

ところが4月なかば、同じウッタルプラデシュ州内の45歳と35歳の夫婦が、「少女は自分たちの10歳の娘だ」と名乗り出た。

英紙インディペンデントなどによると、夫婦は昨年3月、混雑する市場で買い物中、ほんの少し目を離したすきに娘を見失ってしまったとしている。娘は精神的に安定しないところがあるという。

捜索に「金」要求

夫婦は翌日、警察に届け出たが受け付けてもらなかった。仕方なく自分でピラをつくって張り出すなどして捜したが、手がかりを得られず、誘拐されたか亡くなったものと希望を失いかけていたという。

「私たちが警察を訪ねるたびに、『助けてほしいければ金をよこせ』と言われた。どの警察官もとりあってくれなかった」

日雇い労働者の父親は英紙デーリー・メールに、あからさまに金銭を要求する警察への怒りを話した。

夫婦は少女の発見を伝える報道を見て自分たちの娘だと確信し、収容されている福祉施設をたずねて面会した。父親は「じっと私を見つめ続けた。それが彼女の普通の反応だ」と話す。

ただ施設側では、面会の際に少女が「父親」に反応しなかったとし、引き渡しには正式な親子関係の確認が必要だとしている。

父親は「娘がどうして森にいたのか、どうやって生きてこれたのかも全くわからない」と話す。少女は7人の子供のうちひとり。親子関係を証明するDNA検査のためにも、お金が必要だと訴えている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行